

第4回植田久男書展 記録集

会期：平成20年11月25日（火）～30日（日）

会場：アートワークスギャラリー（水戸）

「ご来場の皆様へ」

このたびはお寒い中、そしてまた遠路「ご来場いただき、ありがとうございます。」

皆様からの温かいご支援や励ましをいただき、第四回の個展開催することができ、心より感謝申し上げます。

今回は「故郷」をテーマに近代詩文や自作詩などを書作品といたしました。まだまだ拙い書で心苦しい限りではありますが、「ご高覧賜れば幸甚に存じます。」

諸先生方、ご友人の方々からのご鞭撻を賜り、今後一層自己研鑽に努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

平成二十年十一月 第四回書展開催にて

植田 久男（愚海）



お花をありがとうございます



普段何気なく交わしたあいさつの言葉の響きから
その日の体調や心理状態を感じ取ることもあるそうです。

「言葉（ことば）」という言葉には
人間の体から出てくる声や言葉には
やはり魂が宿っているような気がします。
相手の人を励ます英気を与える言葉もあれば、
逆に傷つけ落ち込ませる毒の言葉もあります。
相手を引き付けようとして多くを語れば
嘘や失言も多くなります。

あまり多くの言葉は必要ないのかもしれませんが。

限られた字数の中で、的確にその情景や出来事を

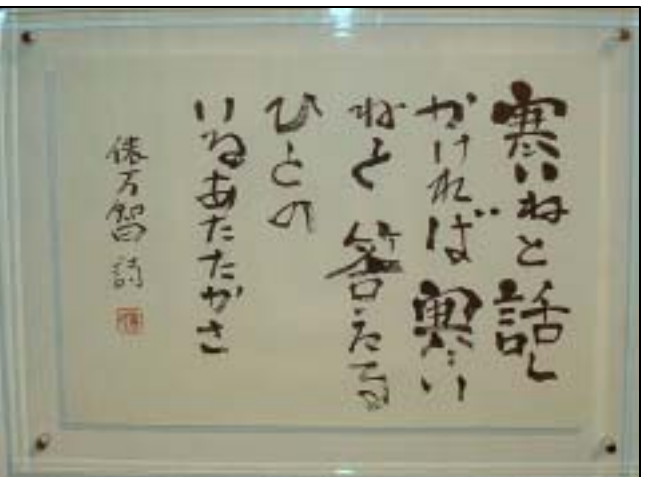
言い表す短歌や俳句の世界はすごい。

それを読んだ人、聞いた人が、

さまざまな想像をめぐらし、再現してゆく。

この歌にも、白い息を吐きながら、ちよつと首をすくめ

会話するほのかな一人の温かさが感じられます。



「寒いね」と
話しかければ
「寒いね」と
答えるひとのいる
あたたかさ

俵 万智 詩

『故郷』

今回「故郷」をテーマに選んだのは

昨年、母親が他界したことがきっかけとなっています。

母は晩年、茨城で過ごすこととなりましたが、やはり故郷は秋田であり、その母がいなくなり、自分にとっても拠り所を失ったようで

故郷が遠のいてゆく感がありました。

ぼつかりと心に風穴が開いた空虚さと呪縛から解き放たれたような安堵感が入り混じった複雑な面持ちでした。

故郷の情景や幼い頃の想い出を

例えば「望郷」、「思慕」という言葉にしたとして、

たぶん一生涯で今しか感じ得ない心境が、時間が経つにつれて広がりました。

とても容易に書き現わせる事柄ではありませんが、

なにか残しておきたい衝動が胸中にありました。

そのようなことが根底にあったためでしょうか、

この「故郷」の大字作品は、一回書いただけで仕上がりました。

大字でも何枚かは書くのですが、不思議なことに書き終わった途端に

「もういいわでいい……」と強い感覚でした。





凛(リン) きびしい、りりしい、つましい 130×130cm



わがんね 半切サイズ

わがんね

小泉 周一 詩

人間はみんな平等だ
 なんて わがんね
 そうだったらいいけど
 よく見ろよ
 あつちに偉い人間が
 いるつちゆつごどは
 こつちに偉くねえ
 人間がいるつちゆつごどだっへ

人間はみんな平等だ
 なんて わがんね
 そうだったらいいけど
 よく聞けよ
 あつちに敬語を使われでる人間が
 いるつちゆつごどは
 こつちに敬語使わされでる人間が
 いるつちゆつごどだっへ

人間はみんな平等だ
 なんて わがんね

話し言葉がそのまま文字になって茨城
 弁の特有の濁点や「だっへ」「が生き生きと
 したユニークな詩です。
 でも結構辛辣なことを訴えているよう
 です。みんな違ってみんないいはずだ
 が違つて何がその「個性」を「才」をいつて
 しまつてしまふね。
 なかなか「めだかの学校」「式」のひび
 教育ではなく「すずめの学校」「式」命令
 を掛けたり、順列を気にするよ様な世の中
 です。
 あれ、僕自身の周りでも 敬語を使つた
 り使われたり。自分なんか大して偉くも賢
 くもないのですが……。

『愚 宇』

「愚宇」。なにか仏典の言葉かと思われませんが、
今年の新語・流行語大賞で「アラフォー」（天海祐希）と並んで
年間大賞となった、エド・はるみさんの「グー！」ですね。
なんとも笑いを誘ったあの言葉です。
なかなか好評を得ていますが・・・
出来映えは「グー！」（笑）でしょうか？





故郷

夏追いしかの山
 小鮒釣りしかの川
 夢は今もめぐりて
 忘れがたき故郷

如何にいます父母
 恙なしや友がき
 雨に風につけても
 思い出する故郷

志をはたして
 いつの日にか帰らん
 山は青き故郷
 水は清き故郷



故郷の空

夕空晴れて 秋風吹き
 月影落ちて 鈴虫なく
 思えば遠し 故郷の空

ああ わが父母 いかにおわす

澄みゆく水に 秋萩垂れ
 玉なす露は 芒に満つ
 思えば似たり 故郷の野辺

ああ わが兄弟 たれと遊ぶ

夕空晴れて 秋風吹き
 月影落ちて 鈴虫なく
 思えば遠し 故郷の空

ああ わが父母 いかにおわす



解脱 (ゲダツ) 解放、自由の境地、涅槃 70×34cm



阿ウン (アウン) 最初と最後、呼気と吸気 70×48cm

旅行先やテレビで見かけた風景などから、住みたい
なあと云つ憧れの衝動が沸くことがあります。し
かし、実際に移り住むのには、さまざま現実的な
問題が生じます。

いろんな因縁があつて現在の地に住み、生活を営んで
います。特に不自由もなく、仕事も家庭も近所つき
あいても問題なければ、ずっと生涯住み続けるのでしょ
うね・・・。

生まれ故郷で安心して暮らせること、ひとつの街に
ずっと住み続けること、幸せなことなのでしょう
ね。その街が、好きであること、そして一緒に生涯を
共に、年長いてもそばに暮らしてゆける夫婦、人間関
係が素晴らしいことなのです。

一生涯の幸せをつかむこと、どうでしょう。

この街で

新井 満

この街で 生まれ この街で 育ち

この街で 出会いました あなたと この街で

この街で 恋し この街で 結ばれ

この街で お母さんに なりました この街で

あなたの すぐそばに いつもわたし

わたしの すぐそばに いつもあなた

この街で いつか おばあちゃんになりたい

おじいちゃんに なったあなたと

歩いて ゆきたい

坂の上に ひろがる 青い空

白い雲が ひとつ 浮かんでる

あの雲を 追いかけて 夢を 追いかけて

よろこびもかなしみも あなたと この街で

この街で いつか おばあちゃんになりたい

おじいちゃんに なったあなたと

歩いて ゆきたい

この街で いつか おじいちゃんになりたい

おばあちゃんに なったあなたと

歩いて ゆきたい

いつまでも 好きなあなたと

歩いて ゆきたい





顯無量壽佛真實相經 全紙サイズ

顯無量壽佛真實相經

無量壽佛 光照宇宙
 蓮華藏界 阿彌陀佛
 釈迦世尊 菩提樹下
 曙明星輝 成佛正覺
 浄土世界 存菩薩衆
 白光世界 在守護神
 宇宙生命 藏聖靈光
 是皆全相 無量壽佛
 聖靈為相 光明翔鳳
 衆生聖種 華開成佛
 聖靈大響 十方世界
 是皆玉心 無量壽佛
 過去世劫 久遠未來
 全宇宙相 全如來相
 宇宙開闢 相唯一佛
 佛光遍照 攝取衆生

東北の冬は長い

安藤 照雄

東北の冬は寒い
陽の無い空から白いものが舞う
ほりの深いしわに溶ける
いく分曲がった背にそれが溶ける
髪の色はもう溶けることはない
毎年できるあかぎれの手で
氷を割った流れに白菜を洗う

コタツで居眠りする母のひびきに
ネコも丸くなっていつしよに眠る
農協の会議に出かけた父はまだ帰らない
冬の夜は星も冴えて氷る
柱時計の音が寒気の中に冴える
父さん早く帰ってやれよ

牛の世話をする母
俺達が一人去り二人去り
そのさびしさを忘れるためか
母は牛と居る時が多くなった
子牛をなでる母の顔は
子供の様に無邪気だ

苦難の時代に生き
八人の子供を生み
三人の幼な子をなくした
その当時毎日小さな墓標の前で
一人泣くすがたに私も泣いた
又すぐ元気に働く母
親孝行すると幾度思ったことが

正月 子供達の帰りをひたすら待つ母
帰れなくなつてさぞガツカリしたろうな
手紙を書くなり 母れた

東北の冬は長い
元気で力ぜなびひかなにでね母れた
春になる頃 きつくと帰るや
いつの日にかが又いつに住もうね

お母さん「第一集」より

東北の暮らし

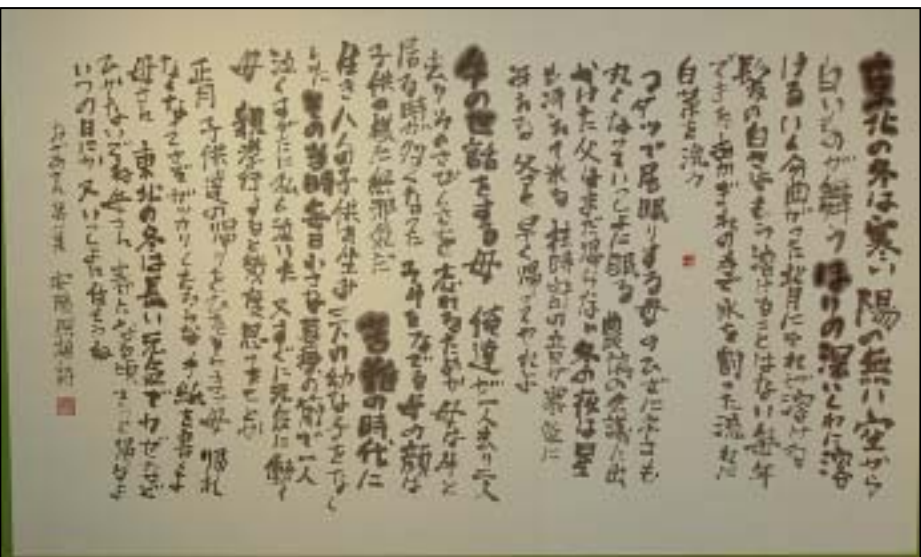
秋田県生まれで雪国育ちのため、この詩には親密感を感じます。まさに自分の故郷を思い起すかのよ
うな情景です。

さすがに町中の住まいであったので、牛を飼ったり、
農作業はあまりなかったものの、雪降る夜は、深
と冷え、星も冴えていましたね。

故郷を想つとき、冬の暮らしはどつしても切り離せ
ない記憶です。最近、雪国の暮らしも住みやす
なつたよつで積雪量も少ない年が多くなりました。

人生の半分以上を雪のない冬を過ごしていると、だ
んだんに自分の生まれ故郷のことも気候も暮らし
りも忘れかけてきます。時々正月などに帰省すれば
早々に退散してきます。

自分の子供らもそろそろ独立し始め、生まれ故郷を
離れています。彼らは、この茨城の地をどのように感
じているのだろうか。そして、今度は自分が子供らの
帰りを待つ身となっています。



帰郷

トンネルを抜けて ふるさとがひろがり

田んぼの一本道を走る

はるかに鳥海山 今も変わらず

歳月はいつしか 流れても

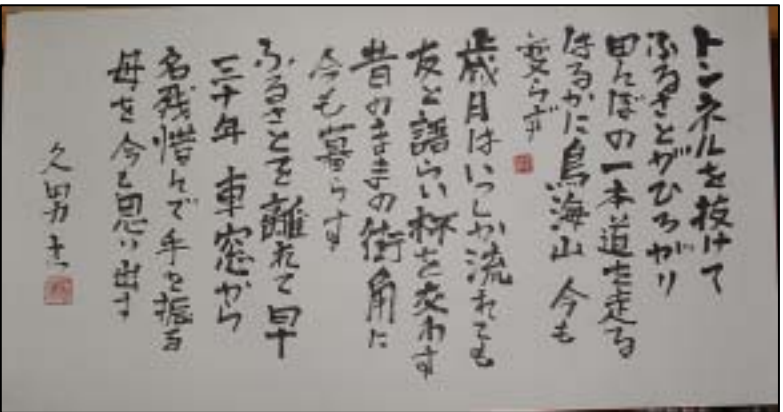
友と語らい杯を交わす

昔のままの街角に 今も暮らす

ふるさとを離れ 早三十年

車窓から名残惜しんで

手を振る母を 今も思い出す



秋田への帰省は便利になりました。新幹線が走り、高速道路も整備され、道中は楽になり、短時間で行き来できるようになりました。

以前は必ず峠越えがあり、細い崖っぷちの国道を対向車を気にしながら通ったものでした。今やトンネル内に県境の看板があり、それを抜けるともう故郷です。

それでも、郷里の町並みや暮らしては昔ながらのものが残っています。歳月が知らぬ間に過ぎてゆきますが、幼馴染とのひと時は、なまびきな想いを彷彿とせしめます。

しずく

好きな菊の季節に

母は静かに旅立った

わずかな衣類と身の回り品を残しただけ、

そっと大地に帰依していった

八十六年の人生で

いつ花を咲かせたのか

春に芽吹き、夏の陽射し秋の実りを迎え

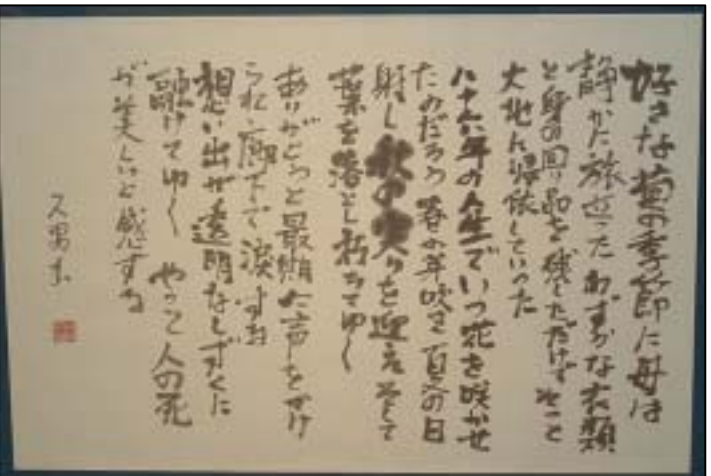
そして葉を落とし朽ちていく

「ありがとう」と

最期に声をかけられ廊下で涙する

想い出が透明なしずくに融けてゆく

やっと人の死が美しいと感ずる



昨年、母親が亡くなり、いつかはこの世を迎えるのだろつと思っていたが、やはり傷心しました。

認知症もあつてなかなか意思疎通がとれないと自分の親でありながら、遠い存在、別人のように感じてしまふ。

しかし、これ、居なくなつてみると懐かしと思つて出が、ほろほろ、ほろほろとこみ上げてきます。それまで断片的な事柄が、連鎖的に繋がつてゆくように遠い記憶を甦りせしめるものです。



あとがき

あらためて「故郷」の歌詞を読んでみます。

大正3年の文部省唱歌、作詞者は高野辰之氏、作曲は岡野貞一氏。この旋律は、賛美歌の元に行っていると云う人がいます。たしかに歌詞は日本的な感じですが、長く歌い継がれ、多くの人の心を惹くのは、なにか賛美歌に似た曲想があるのかもしれない。

故郷を離れ、自分の生活圏が現在地に定着し、仕事や家庭も根を生やし生まれ故郷が徐々に遠のいてゆきます。真っ白な吹雪が窓ガラスを叩き、すきまから雪が吹き込むような家での暮しも今は懐かしい。みんな若かった。母も若く自分も甘えられた年代が、もう遠い過去のことではありませんが、今でも望郷の想いが、静かに灯っています。

今回も自作の詩を書きました。特別な創作もなくそのままの記憶や情景を綴っています。稚拙な詩ですが、来場者の方々から感動しました等の感想をいただきました。励ましのお心遣いもあつてと思いますが、自作詩を評価していただいたのは、とても嬉しい限りです。

武田双雲氏が、その著書の中で「表現」について述べています。「意識」ではなく「意志」を表すこと、「情熱」「個性」「エネルギー」が大切だと書いているように感じます。

書展が、単に気に入った文字や言葉を書き表した催し物ではなく、書という表現によってなにか作者の心の表れが外の世界に伝わることに、それを観る人は望んでいるのではないかと思います。このことは私の新しい道標です。カラオケ的な書展と評され、少々へこんだ時期から四回展では少しだけ進歩できたように思います。

五回展は、いよいよ大台（五十歳）の年齢に合わせ開催いたします。人生も後半戦です。書の腕を磨き、心を清め、志も高くして臨んで参ります。

植田 久男

お礼の言葉

第四回個展には、ご多忙中にもかかわらず、

遠路そしてお寒い中をご来場いただきましたことに、

心よりお礼申し上げます。

「故郷」ということで、

情緒的な作品が多かったように感じております。

コンパクトな会場で少々窮屈さもあつたかと思いますが、

親しく歓談できましたことは何よりも嬉しい限りです。

皆様から会期中に賜りました励ましやご教示のお言葉を糧として、

率直な思いと熱意をもってさらに線筆を鍛え、

次回展に向け精進してまいります。

今後ともご指導の程よろしく願いたします。

季節柄、お体に気をつけて

皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます

平成二十年十二月

植田 久男（愚海）

